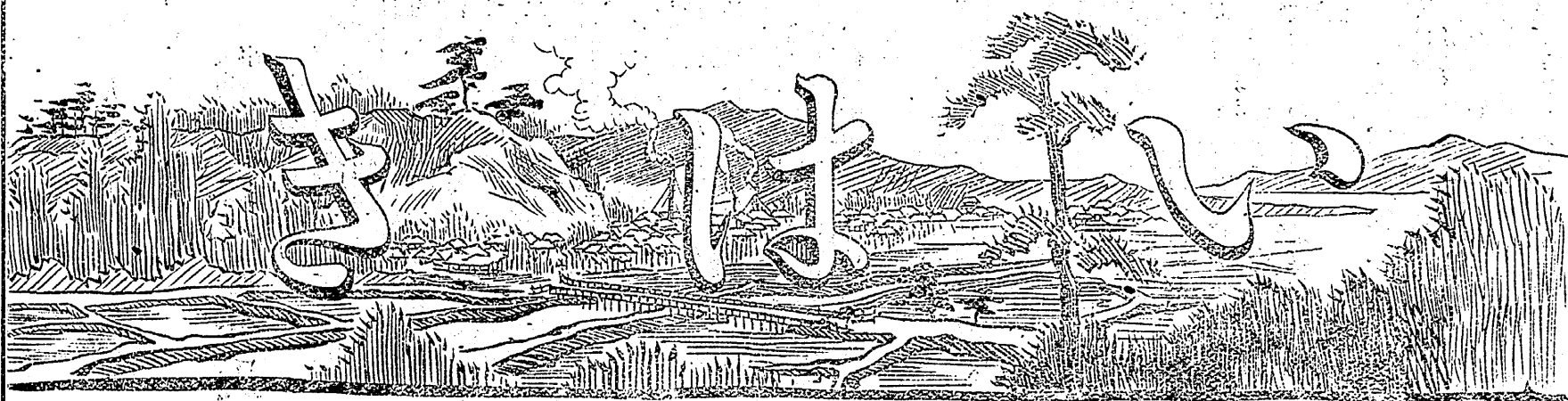




主 張

青年の活動

國民の元氣は、常に青年によつて維持せらる。今日に於て我が日本の元氣を維持し、世界に向つて活動せんには、世の所謂青年の負ふ所極めて大なるを以て、一都會と云はず、一地方と云はず、苟も青年たるものは大に活動して、地方の風氣を振作すると同時に、一國の元氣を維持するに努めざる可からず。

然るに今日に於ける地方の青年者流を見るに、多くは惰弱に流れ、不品行に陥るものあり、是れ實に憂ふべき現象にして、大に警戒せざる可からず。吾人は維新史を繰り見れば、轉た當時の青年の氣概あるに感ぜずんばならず。維新の大業は全く、隆長土肥の青年者流によりて成就せられたりと言ふも、餘りに大なる過誤にはあらざる可く、獨り日本に於てのみならず、世界の政治變遷史を見れば、世の改革若くは革命の如きは、皆な青年の手によりて成就せられたるを見る。蓋し老年者は保守に傾むき易く、其の結果として進歩の行路に上ること極めて難し、青年は然らず、彼等の眼中には過去なるものなく、一意唯未來あるのみ、而かも彼等は現在に満足する能はざるの精氣常に滿ちたるを以て、進歩は實に青年の手によりて作らる。彼等の夢に入るものは未來也、未來は彼等唯一の希望なりと云ふ可し。

吾人は都會に於ても、地方に於ても、青年の氣風が、著しく變化したるを見る。曾て太き袴を打ち振る、短袴短袖を穿ちて、都大路を闊歩したる學生が、今更だ何れにか往きけん、腹だに見ることをせず、長袖寬帯、甚しきは身を車に托して揚々たるものあり、是れ蓋し世が文明に趨きたるが故なるべしと雖も、世の最も恐るべきものは文明の弊なり、文明は喜ぶべきも文弱は恐るべき、青年の不品行に陥るも、情弱に趨くも、皆な其の根源を文弱に發せざるはなし、吾人は徒らに抽象的に此の言を爲すものにあらず、歴史は能く之れを教ゆる也。

人は平家の没落史を讀みて、皆な其の詩的なる感に打たれ、平家の一族が何れも弱虫なる公達にして、到底關東武者の敵にあらざるを言ふ、然れども平家とて決して始めより彼れが如き弱虫のみにあらざりき、彼の貞盛を見ずや、平親王と僭稱したる將門を打ちて、青史に功名を垂れたるにあらずや、彼の伊勢の少將を見ずや、木刀に銀紙を貼付して殿上人を驚かし、山俗の怪物を捉へたるにあらずや、彼の入道清盛の青年時代を見ずや、高僧を穿ちて都大路を闊歩し、高平太の緯就を唄はれたるにあらずや、彼等は決して人後に落つべき弱虫にはあらざりき、然るに其の子の宗盛は如何、其の孫の維盛は如何、一は自ら屠服する能はずして見苦しき最後を刑場に送げたるにあらずや、他は頼朝の浦に死を強族と共にする能はずして、熊野に投身したるにあらずや、此の如き差は其の境遇の異なる處より、文弱に流れたる結果に外ならず、彼のハジニバルがアルプスの高山を横斷して羅馬に侵入したる時は實に目覚ましき勢なり、然るに一冬を過したる後は、脆くも敗軍の將たりし所以のものは、其の兵の情弱に陥りたる結果のみ、歴史は實に文弱の弊を知らざるを注意すべく、文明に進むと同時に、野蠻力を失はざるの用意を爲すべし、今のハイカラなる風儀は、青年者に取らて最も恐るべき、活動は實に野蠻力の保存によりて繼續し得べし、野蠻力と云へば、語弊あるに似たりと雖も、心身の強健は多く文明によりて削らる、今日の青年の注意すべきは是のみ

いはき廣告取扱御名人益陶子金文字入調製

平町四丁目紀念堂

城盤

三井呉服店

新聞雜誌書籍卸賣業 平陽社

定價一部金壹圓 外一郵税五厘 編輯人高木朝重 發行所 福島縣石城郡平町 字白銀町貳番地 いはき社



力可室屋呉服店

平町四丁目南

印刷鮮明 價額低廉

平町二町目

山崎活版所

人物月旦

入山炭坑 石川權介氏

足尾銅山の暴動以來、坑夫の同盟罷工は各炭山に波及、觀内炭山の如き、別子銅山の如き、或は帯江に或は夕張に、暴動は流行となり、警察權で鎮壓する事は出来ずして、軍隊を動かすに至る事、今年に至りては更に上り、労働者暴動の原因は各所同一では無いが、併し其主因となる者は何時も、礦山事務員の統御方法の不可なる事である、二統率の人格なき人物のために、幾多可憐なる労働者の血を流し、罪に陥らしめ、又人民をして生命財産の不安を感ぜしめ、甚だしきは山下の股肱たるべき軍隊をも煩はすに至る、人物の横暴なるべからざる、礦山事業に於て殊に其切なるを感ぜらる。

△無名の偉人

偉人は多く其名を世に知られない、官位も無く勲賞も無く學位も無く、たゞ有るものは手腕と頭腦との二つのみ、而も事業の上には及ばず力の大きなこと、名あり位ある者は

よりも遙に過ぎたるもの、世の中には決して少なくない、吾人が茲に紹介せんとする、入山炭坑株式會社の炭礦事務局長石川權介氏の如き、確に其一人である。

石川權介氏は嘉永五年津若松の城下に生れた氏の父は會津藩にては可なりよい士族で、氏は藩校日新館に於て、武士の教育を受けた會津武士は剛毅質實で而も謙遜なが特色であるが、氏の全身にも亦此の善き武士氣質の血液が濃溢して居る、戊辰の戦争には、氏は漸く十六歳の身を以て藩の兵隊に屬し、各所に轉戦大に功をあらはしたが、時運非にして藩侯は降参軍に召ふに至り、氏も亦太刀を捨て、町人の間に居りたるも、天稟の勇氣は益々振ひ、儕輩の重視する所であつた。

△平の戸長
明治十七年、氏は平町に來りて郡衙に職を奉じたりしが、越て十九年に至り平町外十九ヶ村の戸長となり、廿五年町制實施の時に至るまで其職に在り、治績頗る著りて良戸長の評判が有つた。

△始めて炭山に入る
明治廿八年、川崎八郎右衛門、白井遠平氏等が、白水輕便鐵道會社を組織して、探炭事業を始めるや、氏は庶務課長として入社し、殆ど一人で各事業の經營をして來たが、廿八年六月、白水輕便鐵道會社が入山炭坑株式會社に買収せらるゝや氏は又事務局長として入社し、爾來今日に至るまで、終始一日の如く、其事務に精勵して居る。

△教育に熱心
氏は教育熱心家で、内郷小學校へは路遠きのみならず、道路が甚だ險惡で兒童の通學困難なるを察し、玉城炭礦の事務員と協同して、末三十二年中小學校を開き、役員の子弟は固より、坑夫の子弟をも就學せしめた。

△知事以上の人物
氏の手腕と識見とを以て、若し政界に立たしめたらば、必ず知事以上には登り得たのであらうに、無位無冠の事業家たるに甘んじ、身を炭坑事業に捧げて拮据電勉、山中に盤居して寧ろ不平不満の念慮なき所、實に當代青年者などに取れば、活金言で有る、入山炭礦今日の盛運を來せるは、川崎氏よりも白井氏よりも、石川氏の力に負ふ所多しと言ふも差支なからう。

△謙讓温厚の人
氏は今年五十六歳の高齡に達せしも體操壯者を驚き、性質極めて謙讓、温容人に接するも、而も一種威風凛々たる威光を感ぜしめる、度量廣大にしてよく人を容れ、長たるに過ぎぬ一人格を備ひて居る入山炭坑が十三年間速成の書法階梯に就て實に又は本書により自己の書法等を發行人に送らば一々先生の答を得又は批評を加へて返送すべし本書は實に書法自宅獨修書と云ふも不可なき良書なり

發行所 京橋區日吉町四番地民友社 發行所 赤坂區高松町七十二番地高城寛雄

福見屋 境屋 白土屋 萬屋 酒井屋 伊勢屋 柏屋 大室屋 常盤屋 油屋 大一屋 吉田屋 太丸屋

組砂糖問屋 合員

三丁目 大津賀善吉 新川町 吉田定太郎 根本仙三郎 山下捨吉 松本與三郎 松崎長三郎 新川町 松崎恒吉 阿部太 阿部唯次郎 酒井勘左衛門 北村幸吉 白土茂平 久野柳助 鈴木力藏

高常墨地先生著 第四版 習字書法階梯 全定價金廿錢 郵税金貳錢 本書は普通書籍の如く只讀むのみにして得るところなきが如きものにあらず常冊の購讀者たる以上は習字法に就て質問又は本書により自己の書法等を發行人に送らば一々先生の答を得又は批評を加へて返送すべし本書は實に書法自宅獨修書と云ふも不可なき良書なり

發行所 京橋區日吉町四番地民友社 發行所 赤坂區高松町七十二番地高城寛雄

教育叢談

平小 中根卯之助氏

平小 中根卯之助氏は、縣内第一の大なる小學校である、縣内に比肩すべきものを求めたならば、西白河郡の白河小學校と、岩瀬郡の須賀川小學校とであるが、此の兩校は其の輪廓が大がや、近いといふだけで、實質は到底同一平面上に立ち得ない。

大なるものを治めるには大なる人物を要する、平小學校には現在、千九百名の男女生徒、三十七名の男女職員、三十二の學級とが有て、一ヶ年の經費は八千五百圓に達して居る。單に數字上から見れば、かりても決して小さい小學校でないことがわかる、而して此大なる小學校の主腦たる、校長中根卯之助氏は果して如何なる人物であらうか。是を研究する事は平町の將來に對して深い注意を拂ふ人々に取ては、頗る興味のある事と思ふ。

中根氏は本郡神谷村出身であつて、師範卒業生中のかう古い方である。氏は明治三十五年の三月當地に來任したのであるが、其以前は會津喜多方の小學校校長を勤めて居たのだ、喜多方在職中の氏は、奇談が乏しくなかつたが、今其一二を紹介して見よう。

喜多方に赴任した當日、氏は郡役所に参り込み鼻息荒く郡長を面會した。其言分が面白い。學校の良否優劣は支那をのぞけばすぐわかるものだ、我が喜多方の學校の現狀はどうだ、設備も整理も全く滅茶だ、此様な事で教育の能事終れりと言ふし込んで居る、教員も教員だが、監督者たる郡長も無責任極まるわけだ、我輩の意見は斯様々々だ、辭令にも何も御構ひなしに、率直にやつてのけたので、郡長も氏の直言に感服さ



中根卯之助氏

るを愛し、肝膽相照らし胸襟相開き、大に教育の好果を擧げたやうである。

喜多方在任中の奇談は、甚多に反對運動である、當時の氏は極端なる耶蘇教ひで、非常に激烈なる排斥運動を試みたものである。處々で反對運動をやつたのみで満足せず、幻燈機を持って各部を巡回し、極力基督教排斥に努めた、其結果には格別見るべきものも無かつたのであるが、其狂熱的行動には地方人も、少なからず驚いたのである。基督教排斥の正否は論外とし自己の所信を遂行する勇氣に至つては、當世の教育家には珍らしい。

以上の事實だけでも、氏が自信斷行の人

れば、惜しげなく自己の考を捨て、直に應用する、だから三十餘人の職員は、皆氏の下に事をなすの樂みとして居る。

氏は又頗る附の潔癖家で、塵一筋でもひく氣にする方だから、學校の掃除などに關してもなかに八釜しく曰ふ。故に平小學校は外では見られないほど、清潔になつて居る。

氏は非常なる勤儉貯蓄の獎勵家實行家で、氏に依りて學びらる、平小學校教員の服裝の如きも、頗る質素である、職員間の吉凶慶吊慰迎會等には一切酒を用ひず、清楚なる茶會を開かせる。非五年三月來任するや、翌月から職員貯金の規約を定め、毎月係給の百分の一以上を積む事を定めた。最初には不平を訴ふる者も有たが、爾來者々實行して來て、今や毎月の總貯金高十圓を超え、一人にして百圓餘の貯金を有する者四名に及び、總金額は千圓に達するとして居る。

生徒の貯金は八千七百圓に達し、一人平均廿圓以上を達して居るが、其預入は生徒自身にやらせて、自治心養成の一助としてある、些事ではあるが、善い方法であると思ふ。

試みに朝早く平小學校の門前に立て見たまへ、千數百名の頑固な男女生徒が、嬉々として遊び戯れ居る時、始業の鐘音一度聞えれば、兒童は一齊に遊戯を止め、玩具を置いて所定の地位に就くこの早い所規程嚴重なる軍隊でも、あのようには往くまいと思ふ程である、是迄訓練をしとけるのは、職員も十二分に骨を折つたであらうが、校長五年間の苦心たるや、蓋し尋常ではなかつたやう。

氏は形式のみを懸へるのではない、實質ある教育を行はんとことを理想希望とし、教授法や教材の研究には大に力を入れて居る職員會議の如きは、夜に入りて終らざる事

遠方ハ通信ス生年月日記入

易諸占斷

地理家相撰擇

智德館

鈴木兼政

平治町

中懷

丹皮膏

橋本礦業商議所

位置 磐城國石城郡平町字田町 五拾壹番地 (裁判所前)

業務 各礦山炭山ノ礦區調査測量製圖探礦設計 及監督ノ依頼ニ應ス

拙者儀從來入山、磐城、越後、各炭礦技師ニ歴職致來候處今般前記ノ場所ニ礦業商議所ナルモノヲ設置シ地方礦業者諸君ノ御便利相達シ候條御用命被成下度候

所主 橋本旭

最優等金鵝印煉牛乳

發賣元

東京市日本橋區大傳馬町

逸見山陽堂

國扇扇子密柑間屋

東京日本橋區堀江町 大和屋新井嘉兵衛

地方研究

磐城關井嶽の龍燈

磐城關井嶽の龍燈 岡田毅三郎

磐城關井嶽の龍燈 岡田毅三郎

阿武隈山系の東側に當り、海岸に沿ひて一帯の平地あり、北緯三十六度半より三十八度に亘り、南北五十里に餘るも東西僅に數里に過ぎざる狹長の地區なり。此平地は常陸縣城の二國に跨り、阿武隈山系の支脈東海に向ひて斗出し、横谷極めて多く、高山大河なしと雖も、峰巒細流極めて多く、地勢北山系東部の陸中の東海岸に酷似せり、陸前濱街道に舊日本鐵道會社の海岸線は、此平野を縱貫し、山河の方向と殆んど直角に走るを以て、橋梁隧道の多きこと、他に多く其比を見ず、平野と富岡町との間の如きは、其距離僅に十里に過ぎざるも、隧道の數十六個の多きに達し、一丘送れば一丘迎へ、乘客をして車窓の開閉に飽きさせしむることは、能く人の知る所なり。

此平地の中央部なる常陸の境より中村の北數里の地に至る、凡三十餘里の間は總て福島縣の管轄に屬し、南中北の三部に分ち北を相馬郡といひ、南を石城郡といひ中央を雙葉郡といふも、地方人士は舊慣によりて之を二部に分ち、雙葉郡役所の所在地なる富岡町以北を相馬地方といひ、以南を磐城地方と稱す、相馬地方は中村を、磐城地方は平野を、政治商業等の中心となし、氣候風俗互に相異なる所からずといふ。

▲磐城地方 阿武隈山系の支脈は多く海岸に向ひて東方に斗出せるを以て、磐城地方のみにては其山脈少からず、佛光山は南方にありて其峻嶒たる連脈は常磐の境をなす二ツ矢三森の山嶺は北方にありて雙葉の山地を造り、關井嶽の南の二連脈は中央部にあり、相馬行して西北より東南に向ひ磐城平野の間に屹立す、地方人士は此二山を共に磐城の名山と稱するも、關井嶽最に著るは、河川の稍大なるものは南方に鉾川あり、東白川郡より來り鉾川屈曲して植田の東に至り海に注ぐ、流域十餘里磐城地方第一の大川なり、北方には夏井川あり源を植田郡大瀧根山に發し、東南に流て平野の東を過ぎ東海に注ぐ、流域殆ど相同じ其大さ鉾川に亞ぐ、此二川の流域は共に稍廣闊なる平野を造り、磐城に於ける主要の米産地なり、此二川の流域と其中間に位置せる第三紀層の平地とを合して、更に一大平野を形成す、此平野は東西三四里、南北八九里に亘り、阿武隈山系の東側に於ける唯一の平野なり、此平野は其西側一帯の地に炭層の露出せるあり、現時盛に採掘に従事せり。

磐城の地、地味豊かならず、産業振はず、専ら桑の利と魚介の得とを以て、衣食せる東販の一環なりしが、一朝石炭の地下に包蔵するを發見するに至りては、大に世人の注意する所となり、忽ち海岸線の鐵道は敷設せられ、採炭の事業は各所に勃興し、大に地方の富源を開き繁榮を來し、産業の一大發展を見るに至れり、蓋常磐の炭田は南は常陸國多賀郡豐浦町大字友部の邊に起り、磐城に入り、湯の嶽關井嶽の東麓を経て、北は雙葉郡大野村大字野上に至りて滅盡するものにて、直徑貳拾餘里に亘れり炭層は南部に薄くして、漸次北進するに従ひ次第に其厚さを加へ、湯の嶽關井嶽の東麓に於て最厚層となり、これより北進するに従ひ再び薄層となり、野上邊に至りて消滅するものなり、磐城の地は常磐炭田に於ける南北の中間に在り、最厚層の厚き部分に位置せるは誠に幸運といふべし。

常磐炭田に於て、採掘の盛なる地方は常陸の磯原四近と磐城の平野四近なり、磯原四近には茨城炭礦會社、茨城探炭會社、龍島炭礦、野口炭礦、宇佐見炭礦等あり、其採炭は馬車に、或は輕便鐵道によりて、磯原を平野四近の炭山に比すれば、其の規模といひ、産額といひ、及ばざること遠し、平野四近の炭山は常磐炭田の最盛なる地方にして、運炭専用の鐵道三あり、内郷線、入山線、及小野田線はなり、内郷線によりて運炭せるは内郷炭礦の外、越後、伊藤、水野、津川、の四炭礦あり、入山線によるものは入山探炭會社の高倉、川平、不動澤の三炭の外、三友、水野、三里、山口、王城の五炭礦あり、小野田線によるものは小野田炭礦の外に、王城炭礦によるものは小野田炭礦の場に於て、入山内郷の二線は共に總停車場に於て日本鐵道線と連絡せしめ、或は南に或は北に多量の石炭を輸送せしめ、明治三十八年一月より十一月までに、總停車場より發送せし炭量のみにて、五十五萬三千餘噸に達し、運賃の収入は月によりて多少の増減ありと雖、去る三十八年の平均にては、一月金六萬九千二百餘圓宛なりといふ、日本鐵道全線中毎月貨物貨金一萬圓以上の收入あるは、秋葉原、關井、青森、鹽釜等にして、總に其首位に位置するを知らるに足らん、

以上述べたるが如く、磐城の地は採炭の事業盛んなるも名邑大都に乏し、沿海の地に久の濱、四ツ倉、江名中の作、小名濱等あれども何れも皆小市街なり、中の作は維新の際までは磐城の一要港にして、三春、二本松、會津等の貨物は專ら磐城に運搬し、常此港より積卸しをなせしを以て港として繁昌せしが、其後、海運の事業は多く小名濱に移りて、大に發達せり、小名濱は沿海市聚の最大なる市街にして、鐵道開通前に於ては、磐城の石炭は皆海運により此港より輸送せしものにて、現時磐城の一要港なり湯本は古來より温泉を以て知られし所なるも、鐵道開通以來、大に面目を改め浴客群集するのみならず、四近に於ける諸炭山の運炭地として、近來一層繁榮を來せり、平野は磐城唯一の都會にして、戸數二千餘、人口壹萬四千、郡役所、裁判所、警察署、中學校等ありて、磐城地方に於ける司法行政教育の中心なるのみならず、又商業の中心にして、磐城地方の貨物は皆此平野より聚散するものなり、況んや、又其四周には數多の炭礦及び粘土坑等ありて、總て物資の供給を此に仰を以て近來一層繁榮に赴けり

磐城古事記 推谷生

奥州磐城關井嶽といふは磐城郡に在りし村名なり、千丈嶽の館主岩城一郎此地の草高千七百七十九石九斗七升を領したりしに、會津城主蒲生氏と戰ふて敗れ滅亡したり、常州太田の城主佐竹氏より岩城氏に嫁し居たり岩城多御前は、尼となりて京都に落ちたり、かくて岩城家滅亡の姿となりて年々衰へたる後、天養元年に至り、常州太田の城主平則道公再び岩城家を興し、居城を千丈嶽と改稱したり、則道公は後に至りて海軍少將と改稱せり、公は實に岩城家再興の太祖にして、磐城關井嶽の所、五郡に於ては本高不足なるにより、常州多賀郡の内二百十郷を磐城郡に附屬す、今日の九面村の地なるが如し、千丈嶽より東西百廿里、南北百三十八里、京都に至る一千十里、東武に至る三百三十里あり、但し六町一里なり、養老元年より磐城國と改められたり。

數字上よ 石城郡

△小學校基本財産 石城郡の小學校基本財産は現金一萬六千三百九十四圓三十三錢五厘、有價證券六千五百一十一圓二十九錢一厘、財産より生ずる収入二千四百七圓五十五錢一厘にして現金にては縣下第三位、有價證券に於ては第四位、財産より生ずる収入は第一位を占む

△商業人員 商業に従事する者は男五千七十三人女一千六百六十三人、合計六千七百六十三人にして、之を若松市の合計九千六百六十五人に比して少きのみにて、他郡よりは其多きを見る

△職工數 本郡の職工數は四千八百九十一人にして、是亦一萬餘を有する若松市に次ぎて縣下第二位を占む、本郡に稍近きものは安房郡の四千五百なり

△補助桑園成功反別 昨年度中に於て縣費の補助により成功したる、本郡の桑園は春季百四十九町四畝廿九歩、秋季三十二町九反七畝廿九歩にして、交附せられたる補助金は總計四千九百七十七圓九十五錢なりといふ

磐城工業界

入山炭坑

△安政年間、石城郡草野村の一農夫は、附近の河水に三四の炭塊の散在するを見出し、是れを流の山中に石炭を藏するに相違なしと思惟し、河を溯りて鋭意捜査したる結果、遂に内郷村大字白水の山内に石炭の露出し居るを發見したり。

△明治廿二年、男爵高崎五十六氏によりて探掘を試みられしが、廿七年に至りて川崎八郎右衛門、白井達平氏等の手に歸したり。氏等は桑田知明、的場中民の二氏を東京より派遣して、精細なる實査を遂げしめたる上、資本金六萬圓を以て、白水輕便鐵道會社を組織し、探炭に従事したり。翌廿八年に至り合資の輕便鐵道會社は、入山探炭株式會社の買収する所となり、兩來手腕ある人物と、新式精巧の機械とを採用して改善進歩し、以て今日の盛運を致すに至れるなり。

△磐城の煤田は南高萩より北熊川に至る、延長實に十六里を有する大炭田にして、地層は第三紀に屬し、炭層の發育甚だよろしく、品質も亦頗る良好なり。炭質は非滲漚炭にして多少の硫化鐵及び石灰を含有し、粘膠質なきを以て汽罐の燃料としては最上なり。

△同社の礦區は内郷村大字白水、湯本村大字湯本より、北端の一部は草野村大字高野に亘り、百六萬一千三百九坪の特許坪數に百七萬六千六百九十二坪の試掘坪數を合み、含炭量五百萬噸を超え、今後三十五年間採掘に堪ふべしといふ。

△目下大坑四個を有し、川平及び高倉の二坑は漸く採掘し盡さんとしつゝあれども、第三第四の兩坑は今後巨額の出炭を見るならん、當時一日の採炭量は僅に百萬斤以上に達せり。

△現任の職員には、事務長に石川權介氏あり、技手長に工學士柴田益太郎氏あり、事務所に山際永吉氏あり、第四坑主任中牟田工學士又斯道に造詣深く、會計の若松條三氏、運輸の長谷川欽太郎、用度の出口國平の三氏、熱心と敏腕とを以て聞え、坑の外、山崎三郎の四氏は精勤の評高く、飯場頭には馬目重次郎、川角源吉、木村善藏、伊藤酒太郎、中洞鐵次郎の五氏、坑夫職工に重せらる、目下役員百、職工坑夫其他を合せて千三百の多きに上り。

△現在探炭量の最も多き第三坑は字入山に在り、湯本村方面に開鑿せん最初の豫定なる由なりしも、運炭鐵道と土地の事情と故に、會社に取ては有益なり。

△坑夫一日の收入、多きは二圓に達し、少きものにも十二圓以上ありこの事なり。

鈴木製鹽所

石城郡小名濱町を西南に距ること二町の所に、赤煉瓦の煙囪高く天を摩するの下、數棟の洋風家屋灣に凝して立てるものは實に非内唯一の新式機關を裝置して建築せる鈴木製鹽所なり。吾人は過日同所主任栗原謙氏を訪ふて、同製鹽所の歴史と概況とを聞き得れば、左に之を紹介せん。

一、善美なる創業の動機

香川縣撰出の代議士井上善太郎氏、一日衆議院の控室に於て、鈴木藤三郎氏に向て曰はく、足下は種々なる發明創設を以て特許を得られたるもの既に多し、今後製鹽機械に就て特許を得らるゝの希望なきが、木邦に於ける一年間の食鹽消費高は約六百萬石にして、其中輸入外鹽三百萬石を超え、他の三百萬石は、資本に乏しき内國の小製鹽業者の產出に係るものなるが、今日の儘に

放置したらんには、國內の製鹽業者は輸入者のために壓倒せらるゝに至らん、四面環海の島國にして、外鹽の跋扈跳梁に委するは實に國家の面目に非ずや、國家の盛衰に關し體面に關する重大問題に非ずや、統計表を前に擧げて言々肺腑より出づる井上氏の言に、大に感動したるの氏は、力の堪ふる限り研究を試みんと、是より製鹽を定めて製鹽法の調査に従事し、以て海内無類の機關を發明したり、泡沫會社の創立委員となりて、權利株の賣買に奇利を占めんとする政客の多き今日、氏の如き崇高なる國家的觀念と、純潔なる愛民の至情とより偉大なる事業を創始する人物を見るは、洵に心強き次第なり。鈴木氏の製鹽業は今漸く緒に就かんとする所にして、未だ其實績を見ること能はずとも、創業の動機にして既に善美なる以上は、其結果の成功たるは疑ふを要せず。氏の製鹽業は道德的成功なり、物質的成功に於ても、數年ならざる中に驚くべき成功を得らるゝことは、吾人の確信する所なり。

二、偉大なる計劃

鐵道研究調査に従ひたる氏は、從來の製鹽法の一大缺點は、釜底に硫酸石灰を附着せしめて釜の破損を早くし、釜の傳熱度を低くし、燃料を多く要したるにあるを發見し、硫酸石灰附着の憂ひ無き、所謂「鈴木式」機關を發明し、昨年中特許を受けるに至り。既に機關を得たるの氏は、場所を求むることに向て歩を進めたるが、前にも述べたるが如く、氏の事業は國家的にして、目前の小利を顧みざる者なれば、若し縣廳の高く計る事甚だ遠大なり、氏の郷里磐城郡は沿海の地を有すも雖、製鹽の唯一原料たる燃料を得る事易からず、九州地方は石炭を多く產すれども、東都を去ること餘りに遠くして交通に不便なり、獨り茨城磐城の地方に近くして、石炭に當りを見る、茲に

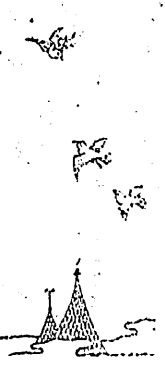
於てか氏は常磐の海岸を踏査すること數回、遂に小名濱を以て、事業を起すべしと地をなしぬ、小名濱の地たる石炭產地に近くして海濱廣く、將來數千萬圓の資を投じて事業の擴張を謀るによし、加之名物の風ありて探炭の便宜を得ること多く、運輸の道又備はる實に無類の製鹽地たるを鈴木氏の眼早くも之を觀破し、小名濱町字高山の海岸四十三町歩を買収して、敷地及び鹽田となしたるなり。

三、製鹽所の現況

客歲着手したる工事は今や殆ど竣工し、八月上旬より製鹽業を開始する見込の由なるが、設備は悉く鈴木氏の獨創に係るものにして、晝夜百石を製出するは容易なるべく、一ヶ月間には六百萬斤を製出せらるべしといふ。目下は主任栗原氏の外五名の職員と、數十名の職工とあれども、製鹽開始の上は百名の職工を要するの事なり。三萬圓餘を投じて敷設したる輕便鐵道は、同所より泉驛に至るの間敷道を終り、製鹽の輸送に用ふるの外、旅客馬車とも運轉して大に地方の交通を助くる等なり。

四、小資本者の爲めに發明

氏の自己の發明に係る機關を據付けて、海内第一の大製鹽所を設立するを志す満足せず、更に小資本者のために、簡單なる機關を發明し、大規模の工場と割合同じき收益を得んことを欲し、既に發明を完成したり、嗚呼鈴木氏の如き博愛同情に富める事業家か、本部の一角に據りて理想的經營をなすを、親しく見て、教訓を受けるを得る小名濱町民は光榮なるかな。



石城郡の水産業

▲石城は天恵に富むことに於て恐らくは縣下第一位を占めん、彼の延長十有六里の大煤田や、日々數百萬斤の石炭を産して、關東北工業界の原動力となり、又十數里の沿海は魚鹽の利源殆んど無盡藏なり、之れ他郡になくして石城の專有する所、石城人は此天恵を關すると共に、よく此利源を開發し廣く世を益するの義務を有す、郡民たは者々は須く此の大義務を自覺して奮闘する所なかるべからず。

△吾人は本號に於ては、過去の統計に表はれたる本郡の水産業を見、追て斯業の發展に於て讀者諸君と研究せんと欲す、以下に掲げる所は皆卅九年度の調査に係るものなり。

鯉	鮪	其他の節類	鰻	田	鰺	貝	鮑	合	鯷	鯨	其他の搾粕	干	合	鯷	鰵	其他の魚油	合	總
節	節	鰻	鱈	作	柱			計			魚油	計		魚油	油	計		計
二六二、〇六五 _原	二、九四〇	三七、五〇〇	一五、〇〇〇	三、三〇〇	五五〇	一、〇〇〇	二、八五〇	三三五、四〇五	七二〇 _原	八、五二三	一八〇	八、一七五	一七、五九八	六二一 _原	六二一 _原	三三三	九五四	三七四、五四五

食鹽製出高

地名	製出高
小名濱町	二五〇〇
鮫川村	一六二
窪久村	三三〇
高田村	二七五
四ッ倉町	三五〇
豐間村	四、一九八
江名村	一、八五〇
泉	一五〇
夏井村	七〇

計 以上は水産製造品なれども、若し之に生魚
 儘賣買使用されたるもの及び海藻類等を
 加ふれば僅に百萬圓以上に達すべし。更に
 本郡の漁業者を見るに左の如し

九、五六五

共進會と石城郡

漁業	八九四	一、五八八	四九六
採藻業	一九三	二六二	一一二
製造業	一六四	三三一	二八四
計	一、二五一	二、一七一	八九二
兼業者			
種別	戶數	男	女
漁業	四八七	八四七	二七五
採藻業	四一九	七一四	八〇九
製造業	一九九	二九四	一四〇
計	一、〇三五	一、九〇五	一、二三四

四月福島市に於て開催せらるゝ奥羽六
 年四月福島市に於て開催せらるゝ奥羽六
 聯合共進會には石城郡にて郡の主要産業
 たる水産物及び農工業製品を多く出陳し
 規模賣店を設けて活動する計畫の由な
 が出品豫定點數は次の如くなりといふ

米 二〇九 清酒 七馬 三
 麥 一二二 醬油 二〇 菓子 九
 大豆 一〇二 蕎麥粉 四 饅頭 二八七
 繭 八一 種苗 一二 魚粕 二〇五
 主糸 二四 藥物 二五 食鹽 六三三

共進會と石城郡

木炭	一七	蠟表	一七	蒟弱	二
蠶種	六	海藻	一七	梨子	二五
挽材	五	木製品	七	生漆	一
陶磁器	五	食用粉	七	田作	六〇
小豆	七	鐵詰	四	海苔	六三
織物	一	絹織物	一	石染花三五	
漆器	一	軋灰	一	朋葵	一
金屬品	九	椎茸	二	炭類	一

吳太
服物
商
小
大
原
商
店

夏物類新柄流行柄澤山取揃置申候

店主 大原長太郎

外科
婦人科
小兒科
内科

宅 診 午 前
往 診 午 後
外科手術每日施行
磐城平町

鈴木 啓院

病室ノ設アリ入院隨意

干物青物
果物甘諸屋問

產業組合

一
手
販
賣

磐城平町四丁目

吉田五郎
電略
(ヨシ五)

電略
(ヨシ五)

電略
(ヨシ五)

名家談叢



餓れば喰へる

伯符 大隈重信

我輩も幾多の困難に出會つたことがあるが、未だ朝に夕を測られぬ、明日から喰ふ物が無い、といふ様な境遇に際した事がない。従つて實際的に云ふことは出来ぬが然し推理で見ても決して悲観すべきでない。人間は餓れば喰へるもの、如何に困つたものでも餓さへすれば喰ふに困らぬ、人間よりも遙に智慧の劣る能力の乏しき居る動物さへも如何にかして生きて居る、我輩は未だ雀が一羽喰へないで死なぬのを聞かぬ。智慧あり労働力ある人間が喰ふに困つて死ぬことはないと思ふ。

假りに喰へぬとすればそれは死ぬだけの事さ、人は皆一度は必ず死ぬ、王者も聖賢も英雄も豪傑も總て人間は早晩一度は死なねばならぬ。異なる所は單に短少の時の問題に過ぎぬ。餓さへすれば喰へぬことは無いと思ふが、然し歐米では近時物質文明が非常に進歩した富が少数者に集中し都市の人口が激増し、生存競争が激烈となる、生活問題が非常に困難となり、色々の事が行はれる、政治家學者宗教家等は之が解決に心血を注いで居るが未だ適當の方法がない、我國は未だ此状態には達して居らぬが、歐米人の最も苦心して居る問題の解決に仲間入りせなければならぬ時機が来るのは遠くはないであらう。(實業日本十の九號)

二宮先生と豆の字

京師農林 西谷忠雄

相馬藩の富田といふ學者が、二宮翁を訪ふ

たが翁は逢はない、富田といふ學者もなかに氣根が強い、翁に逢はなければドウあつても歸らぬと腰を落附けて村塾など開いてる中、翁も感心していつ逢ふことになつた、翁は先づ第一に「豆」といふ字を名な學者であるとうかがふ、江戸で有名な學者であるとうかがふ、富田はあきれ人を馬鹿にしてござると思つたが平氣にかまへ、「ハイ知て居ます、翁では書いて見よ、富田は一生懸命、立派な字が出来た、翁はこれを見られて『成程流石は學者だ、よく書いたが自分のと較べて見よう』と、豆の横を引いて來させて、富田の豆の字と並べられた。それから富田は馬を連れて來させて、翁自分の作らした豆の字と、どちらを馬が喰ふか喰はして見よ、馬は豆俵の方に口をもつて往つた、翁は『學者が馬の上で作つた豆は馬は喰はぬが、己が汗水たらした作らした豆はこれの通り喰ふぞ』と曰はれた。富田はこれこそ通じ、自分が十年一生懸命に馬を痛めた、學問は飾りやうで、實用には遠ざかつてゐる、考いた程役にたかない、成程先生の學問は生きた學問であると、斯

二宮翁の先生は誰か

留岡 幸助

龍澤丁介の先生は中江藤樹で有た、エライ人にはエライ先生がある、二宮翁にもエライ先生が有たらうと思はれるがドウもそうでない、二宮翁に限て先生が無かつた。翁はどういふ物を讀んだかといふことは恐ろしくつてゐる、『野芹』と『日暮観』此二書を翁は非常に愛讀せられた、『野芹』は上杉鷹山の公の師細井平州が公に奉た諫言である。其街中には君の心得べきこと、勤儉節儉の重すべき事、働くべき事、其他民政に關する事柄などが詳しく書いてある『日暮観』は信州松代の城主眞田幸弘公の國家老恩田李が

成功の秘訣

雨宮敬次郎

我輩は常に言つて居る、曰く商賣繁昌の秘訣は『妻に慕ふ、稼業に精進、家に慕ふ』の所謂三慕れにありと。夫婦和合して同心一身になつて稼がなければ到底成功せん。家を外の妾に慕はれ、自然商賣に身が入らぬから繁昌すべき道理がないのである。又家に慕はれないで、外の家に目移りして絶えず轉宅する様では折角作つた得意も失ひ、信用も失ふことになるから、其家の繁昌すべき理屈もないのである。又自己の從事して居る稼業に慕はれないで、彼れも行り此れも行ると云ふことになると、何の商賣も生み出さず終つて遂に一事の成すなきに至るのである。向んでも一たび從事した稼業は飽きず之を成し遂げると云ふ忍耐力がなくてはならぬ要するに商賣繁昌の途は夫婦互に相愛し心を一つにして一旦定めた住所に於て信用を積み稼業を守つて眞摯になつて稼ぐにありと信するのである。(實業日本)

余が平素の覺悟

小野 金六

私は如何なる場合に處するも『人力を盡くして天命を待つ』と云ふ覺悟を以て居る。未だ事を始めない先きは、調査を完全にして出來得るだけ失敗を免がれ、出來得るだけ成功を期する様に、心配もすれば苦心もする、成るべく危険の場所には近づかぬ。俗に『調査を完備して選りなきを見れば、最早毫も心配はせないのである、私は船が嫌ひの方であるが、併し一旦乗つて了へば、どんな暴風雨が來ても一向苦しまずやうなことはない、其れは天命に委して安心して居るのである。世の中を渡るのも然うで、假し難船してもモウ仕方がないと思つて、泰然として居るのである。私の主義は之れであるので、人力で出來る事なら豫かじめ人力を傾倒して災厄を免がらう、方法を講じ、他は安んじて天命の指しを待つて居るのである。故に私は失敗しても毫も焦心せずして徐に再舉を計り來つたのである。』正を踏んで懼る、勿れ、失敗の如き亦可ぞ深く憂ふるに足らんやである、唯憂ふべきは誠實の心を有せざることである。(實業日本八の十九)

脳と鼻

醫學士 岡田和一郎

我々が鼻を引くと鼻を侵かされる、鼻がつまる、思ふやうに鼻から呼吸が出ない、氣

眼病者及小兒、學校生徒及壯丁渡航者、診察及眼病者健康診断及貧民トラホーム患者施療及眼病者職業ノ選擇等凡テ眼病術生上ニ就テ一切ノ相談ニ應ス

診療時間 自午前九時午後五時迄

眼科大學選科卒業 賀澤忠治

○トラホーム症ハ決シテ不治ノ病ニアラズ、早期正確ノ診療ヲ怠リ適當ノ所置ヲ加ヘズシテ重症ニ陥ル、如斯シトラホームハ次第ニ蔓延ス、之レニ患者不注意ハミナラズ醫師モ亦一分ノ責任ナキハズ、己ニ内務省令出デ、世人マスマス其恐ルベキヲ知ル、患者ノ幸福ト豫防要旨ハ早期正確ノ診療ヲ勵行スルニアリ矣、石城郡平町字南町 賀澤眼科

家具の仕舞ひ方

寺庫日誌

問題に於て各型

衆の來れる者千二百餘名満員となりて尙堪
外に溢れ申候、僕は先づ簡單に各地に游廊
問題の起れる情况进行を解説したるに高崎市の
諸衆とは大に趣を異にし、會て方々の聲を

どうかう
てつ同校に赴き申候、先生列席の女學生に
同て一場の講話を試みられ、嚆々として
女子教育が其國の運命に及ぼす所以を説か
し、

廊問題の起り候は最も忌むべき事なるが、然しながら健全なる有志家が奮つて之を排斥する元氣の旺盛なるを見て、僕等は誠に

草野武雄氏は綴羅、佐々木忠右衛門、
 菊柳太郎兩氏は湯本驛迄、吉田菊太郎
 井田山甫氏は關本驛迄送り送られ申候、荷
 行に於て左の諸君が致されたる厚意は先
 好に僕の深く感謝する所に候、
 平松久蔵 山崎孝治 坂本藤藏
 関 豊英雄 飯田十二 佐川重雄
 鹽本鑑治 佐佐余平 佐川康太郎
 志賀彌太郎 田家文兵衛 神谷辰五郎
 堀井代作 最上盛次郎 叶多御吉
 錦引義方 田舎安太郎 草野庄次郎

青木集真館

磐城平町南町

このところきりぬいて御持参のかたには特にわり引いたします

寫眞
壹割引券

土管下水瓶
せきもの
ぬり物
平二町目
か白土支店

平町組合要規

近頃平町に創立されたる砂糖問屋組合の規約中注意すべき要點は左の如し

當組合は平町砂糖問屋組合と稱し平町に營業所を有する砂糖問屋業者を以て組織す(第一條)組合員は各保證金二十圓を組合に積立預けしものとし(第二條)組合員は組合に加盟せんとする者は組合長の承諾を得て前條の保證金を積立するの外更に組合費として金廿圓を組合に納入する者とし(第四條)組合の事務を處理するたため組合長一名組合副長一名を置く(第五條)役員は總て名譽職とし選舉せられたる者は理由なく辭するを得ず(第六條)毎年一月七月の二回總會を開き會務につきて評議す(第八條)組合の領收したる金員は銀行に預け之を管理すべし(第十一條)組合の總面を汚し又は規約に反したる者は總會の決議により除名すべし(第十二條)

石城郡の所得多額納税者

納税額	町村名	姓 名
三〇二、三九〇	平町	諸橋久太郎
二三四、五五〇	同	山崎與三郎
二二一、五〇〇	同	酒井新太郎
一八六、四六〇	同	淺井キミ
一八五、四〇〇	同	江尻幸太郎
一七〇、四七〇	同	大平兵助
一六〇、五四〇	同	小名濱賢司
一四四、〇六〇	同	赤津庄兵衛
一二五、〇四〇	同	大平左司馬
一二三、一二〇	同	三井文吉
一一八、一〇〇	同	堀井正真
九九、〇六〇	同	和田龍太郎
九五、一三〇	同	青木智青
八九、五二〇	同	赤津小四郎
八五、六〇〇	同	山野邊市

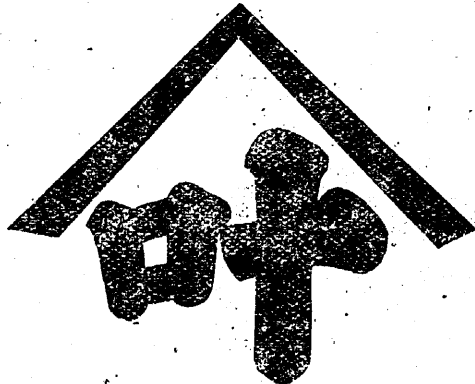
雙葉郡

八五、三五〇	川前	永山徳左衛門
八四、三三〇	山田	安島重三郎
八三、四〇〇	平	中野勇吉
八二、一七〇	同	加藤政久
七七、一〇〇	内郷	馬目留吉
七六、二四〇	川邊	兒玉萬平
七三、一〇〇	上遠野	小澤猪太郎
七一、〇七〇	同	齋藤作次郎
七〇、七〇〇	同	渡部道純
七〇、二九〇	同	平松久徴
六七、三八〇	同	酒井秀次郎
六六、五〇〇	同	赤阪忠次郎
六五、四三〇	大野	木田純江
六五、〇〇〇	内郷	馬目太
六〇、八六〇	山田	小林藏次
六〇、四五〇	玉川	渡邊竹四郎
三三〇、三〇〇	長塚村	齋藤與左衛門
三〇二、三九〇	同	泉田則哉
二二一、五〇〇	同	松本傳
一七六、二五〇	同	早川儀平
一七二、七四〇	同	志賀隆義
一四三、四六〇	同	吉田虎之助
一四一、〇一〇	同	相樂仁平
一四一、一五〇	同	橋本萬助
一〇六、〇一〇	同	木幡常次郎
一〇四、三六〇	同	草野幾右衛門
九九、八四〇	同	大橋久平治
九九、八二〇	同	鈴木市次郎
九一、〇六〇	同	上田善次郎
八五、二二〇	同	幾世橋左藤正信
八四、四四〇	同	木戸早川長重
八四、二八〇	同	長塚安井祥治
八三、〇八〇	同	浪江愛澤寧堅
七八、九八〇	同	浪江橋本久太郎
七八、八四〇	同	浪江西原演次郎
四五、八四〇	同	橋本政藏

荒物乾物

砂糖銘茶

平町二丁目



根本仙三郎

大一屋號

疊表紙類

鼻緒麻類

和洋銅鐵
板硝子類
問屋

日本セメント株式會社特約店



釜屋久太郎

御料理仕出し

梅林

金物商坂田商店

磐城平

ビヤホール

平町新田町の井

處縫裁形新行流新

店服洋\$野歌志

前場車停町平城磐

屋根瓦

赤煉瓦

品質優等多
數ノ製造力
ヲ有ス
論ヨリ證據
現品御一覽
ノ上御使用
アランコナ
希望仕候

磐城國平町字紺屋町角
新太郎改名
佐々木忠右衛門
磐城國好間村川中子
赤煉瓦第二工場
同 平窪村鐵内
瓦工場

平運送會資會社

夏衣 平三町目
新珍柄 龜田屋
取捕申候 洋服店

諸國陶磁器相馬瀬戸
漆器挽地物卸小賣



久武

町走丁目

高号相模屋

目

平町四丁目
關内藥舖

特約店

天壽丸
一切其他下痢病
一効大効了

泉鑛問好齋

◎内服用主治効能

- 一慢性腸胃加答兒 一淋疾 一慢性下痢
- 一慢性氣管支加答兒 一虛性の出血 一白帶下
- 一扁桃腺炎 一咽喉の炎症(含嗽)
- 一眼病にも効驗あるべし (洗滌)

本泉は綠藥含有の明藥泉に屬するを以て染色家の媒染劑
に適す御試用あらんことを乞ふ

定 四合瓶金廿錢
價 二合瓶金拾錢

特約販賣取次御約定仕る可く候

甘酸澁の三味あり水と砂糖とを入れば葡萄酒の如
し又婦人の御齒黒染にも宜し

發賣元 福島縣石城郡平町
田村幡太郎

神谷式製糸器械發賣廣告

接緒器 定價 壹個 金壹圓五拾錢
除節器 定價 壹個 金貳拾錢
拵燃器 (鼓線用二鼓式) 定價 壹個 金貳拾五錢
足轉線系器械 (銘々真棒) 定價 壹臺 金五圓
本器ノ作用及ビ効果

接緒器

第一、本器の接緒法は添着式にして子糸の元緒を剪刀の作用に藉りて切り去り然る後其先端を真直に幹糸に添接するの趣向なるが故一切附節緒端を生ぜしむる
となく其操作の簡易にして添加の正確なるは彼の指
先の働のみに由る技術的接緒法の熟練を要して而も
逸失多きものに優れたる勿論織着式接緒器の方法劣
悪にして煩瑣を起し餘緒を出すものは全然其選を
異にす

第二、本品は除節器を集緒器の下部に設け幹糸の統合
に先ちて其各種の附節及び蟬蟬糸屑等の繰上を防止
して幹糸切斷の憂を省き以て糸量の減損を防ぎ繰糸
の行程を早む

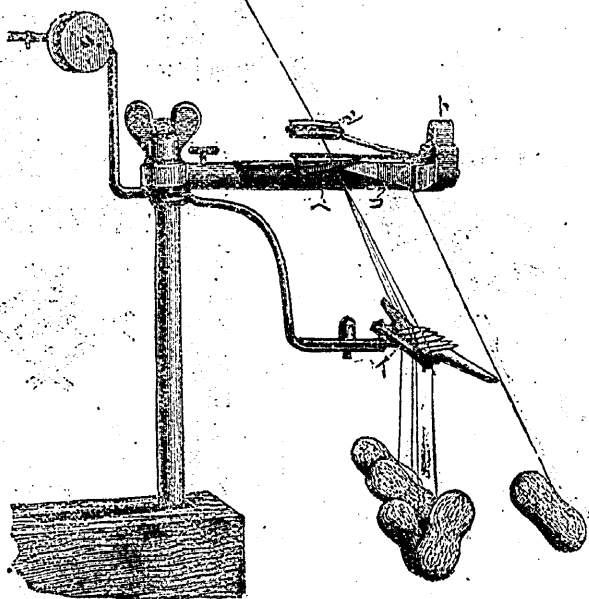
第三、本品の運動は随伴的に指頭の接觸に由り要に
應じて其運動を起さしむるものなるが故其停止に際
し各繰口に次回添加の豫備糸を把たしめ得て繰度の
均一を得るに易からしむ

第四、本器の働は自動的にして之を用ゆるを彼の廻
轉式のもの、如く聯動裝置を設くるの煩なく在來各
種の繰糸器に對し直ちに附屬使用することを得

第五、本器の操作には双手を要せず右手に接緒の操作
を爲しつゝ左手に索緒其他の作業を爲すとを得

除節器
本器は傾斜細溝を穿てる二果の板片の間隙に陶片を挿入して成り幹糸を組成する各繰の通過に屈曲を興へ
備微の牽引力を起さしめて以て本邦繰糸の缺點なる輪節を伸舒す

足轉二糸器
本器は三口繰糸々真棒にして各框止めの裝置を設け廻轉輕快にして接緒器、除節器と相待ちて偉大なる効
果を舉ぐ



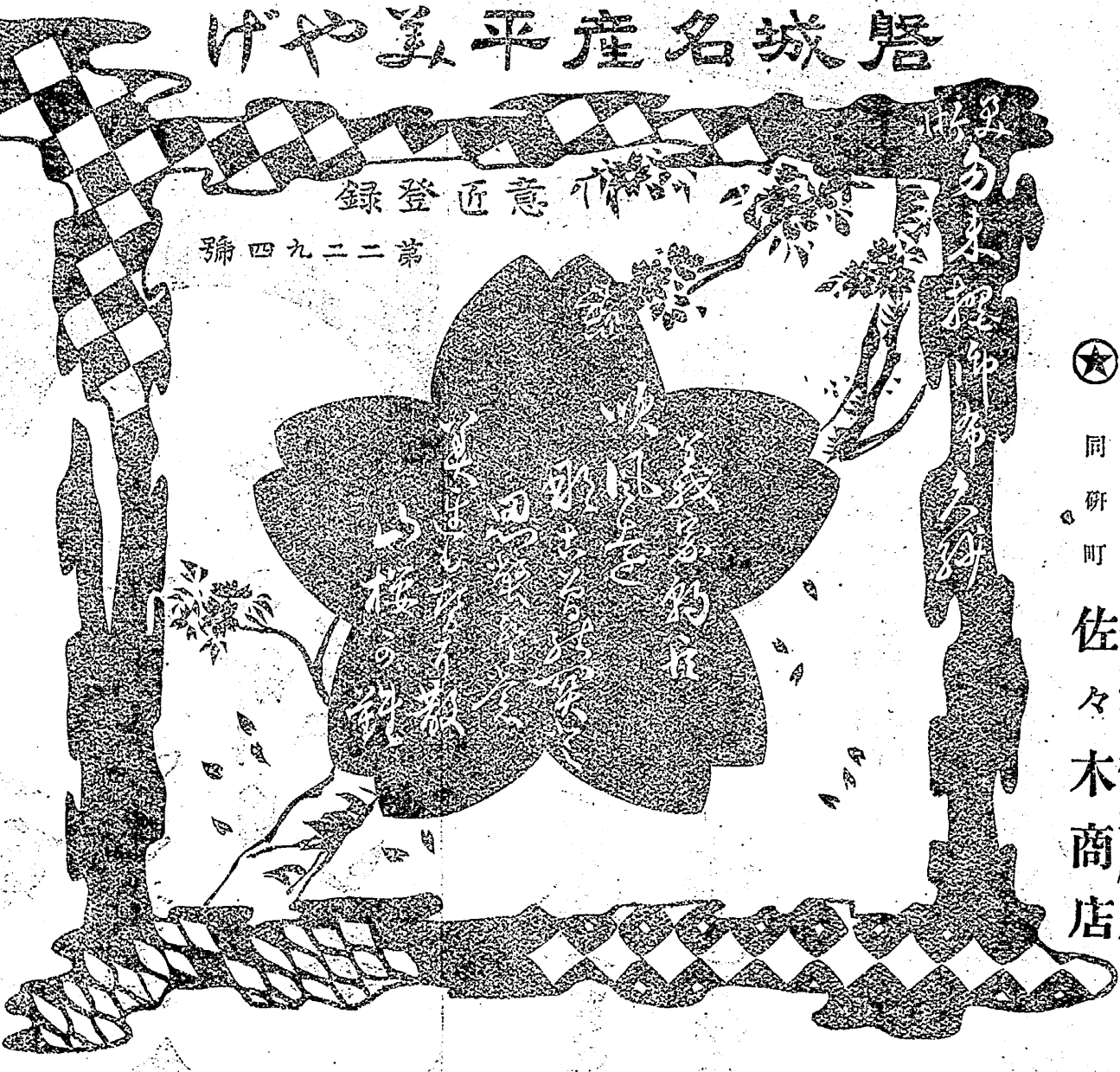
製造發賣元 神谷製糸器發賣所
平町字古鍛冶町九十一番地
平町字二丁目 茗荷屋商店
平町字五丁目 釜屋商店
練習所 平町字古鍛冶町九十番地 神谷製糸器練習所

特約販賣店

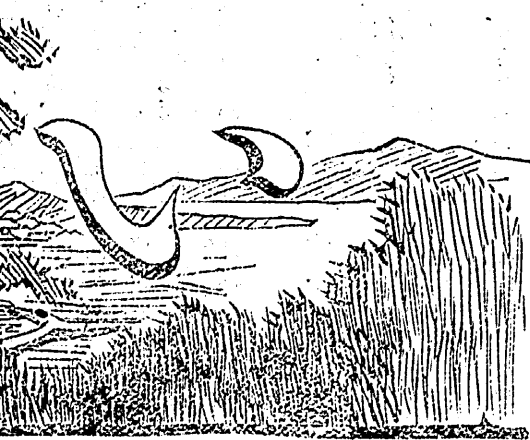
平絹屋町 同 一丁目 同 研町
鹽屋吳服店 仙臺屋吳服店 佐々木商店

名城名産平美やげ

登錄意匠 號四九二二第



美術染物 勿來摺布久紗發賣元祖
小紋 更紗 友禪 磐城國石城郡平町
其他 流行 珍柄 神谷染物店
萬御好ミニ應ズ 神谷 亥三雄
◎紳士貴婦人用ハンカチーフ代用、御進用御土産等ニ最適スル好美術品也



青年の活動

主 張

國民の元氣は、常に青年によつて維持せらる。今日に於て我が日本の元氣を維持し、世界に向つて活動せんには、世の所謂青年の負ふ所極めて大なるを以て、一都會と云はず、一地方と云はず、荷も青年なるものは大に活動して、地方の風氣を振作すると同時に、一國の元氣を維持するに努めざる可からず。

新聞雑誌書籍卸賣業 平陽社

「はき」雜誌特約販賣致候ニ付御注文被下度候

東京市京橋區南八丁堀一丁目二十六番地

振替貯金口座七四壹

定價一部金五錢
外一郵税五厘
五號活字十九字計
發行所 金拾五錢
編輯人 高木朝重
發行所 白銀町貳番地
印刷人 高城寛雄

夏 珍 新 衣 柄 荷 着



力 可 屋 呉 服 店

最新流行珍柄荷を可操至る
京漆物類は好む應に油達を供
平号四丁目南

醫學得業士村上
則祐 ト合局ノ上院務ヲ擴
張シ汎ク入院及ヒ外來患者
ノ需ニ應ズ
磐城平南町
松村醫院
院主松村高知

工場用 製造並 諸機械 修理
礦業用 諸機械 修理
金庫自轉車部
平鐵工所
平町 搔槌小路

大物、荒物、洋傘、帽子、洋酒、罐詰、賣
藥、舟具、其他何品も有ます
渡邊金治製 四ッ倉町
味噌醬油
大取次
加登屋豐之助

新 葉 子 司
は豆文の新法を運進
平二新目
米 京

成 磐 三